

Design Management project

県デザイン経営塾7「地域固有の資源を活用した商店街のコミュニティ・デザイン」

富山県・富山大学芸術文化学部連携事業

富山大学芸術文化学部教授 古池 嘉和



開催趣旨と概要

「県デザイン経営塾」は、地場産業がもつ優れた技術や地域文化を基盤に、現代の生活者が共感する魅力と独自性のある「地域活性化の戦略の方向性」を模索し、経営者のための「デザインマネジメント」の理解と習得の場を提供することを目的として、富山県と富山大学芸術文化学部が連携し、平成18年から開催しています。

第7回となる今回は、商店街をテーマとしています。あらゆる商店街がそうであるように、それぞれの商店街には、独自の「履歴」があります。例えば、そこで暮らしている人々の息遣いや、商品やサービスを媒介とした日常的なやり取り、長い年月を経て確立した商慣習など固有のコミュニケーション・スタイルがあります。

その基盤となっているのは、気候や風土、地形などの地理的な要因と、そこで積み重なってきた歴史的な履歴です。それらが文化資源として、有形無形の存在となり、地域の雰囲気醸成しているのです。

今回、対象となった井波は、木彫を生業とする職人も多く暮らす「商店街」であり、地域の中に多数の固有な文化資源が蓄積されていると言えます。県デザイン経営塾では、こうした資源を活かした商店街自治のあり方を問う、そんな機会として開講してみました。

主催

富山県商工労働部商工企画課
富山大学芸術文化学部

共催

井波本町通り振興会

場所

真教寺

プロデューサー

秦 正徳（芸術文化学部長（当時））

県デザイン経営塾実行委員会

委員長（アート・ディレクション）：古池嘉和

副委員長：矢口忠憲・島添貴美子

学生：林瞳子・二口佳菜・葭野絢香・長谷田優佳・
松田真夏・古川優月

プログラムとスケジュール

☆1回目：2012年9月28日 19:00-21:00

テーマ：塾生相互の立場で、井波の現状と課題を確認





開講式

第1部：ディスカッション

今回、塾生として参加するのは、富山大学の教員と学生、そして井波彫刻の職人や地元商店街の方、コミュニティ誌の編集者など様々な立場の皆さんです。生まれも育ちも井波だから分かることもあれば、外から来て初めて気づくこともあるはずです。第1回目では、それぞれの立場から、井波の魅力、現在の問題点・課題について考え、情報を共有化しました。

第2部：プレゼンテーション

ワークショップでは、A班（町あそび）・B班（WE LOVE本町）・C班（きちっと井波）に分かれ、ディスカッションを行いました。班ごとにプレゼンテーションシートに「井波の魅力」「井波の問題点」を書き出し、情報を整理しました。

*（ ）内は、最初に考えた各班のテーマを想起させるようなチーム名称。

【焦点1】

井波にはどのような観光資源があり、どのような魅力があるか。

【焦点2】

井波が抱える問題点、課題は何か。

☆2回目：2012年10月6日

テーマ：町の文化資源を再評価する

第1部：フィールドワーク

1回目で共通認識した井波の課題と魅力を踏まえてフィールドワークを実施しました。各班に分かれて、それぞれにルートを設定し、文化資源を探するため町歩きをした。観光資源、文化資源として既に認知されているものも、また、これまではそのような認識がされていなかったものも、視点を変えれば新たな文化資源として再評価できると思われます。

第2部：プレゼンテーション

班ごとに、資源採集を行って、資源の再評価を行いました。その情報をマップに記入し、全員で情報を共有化するため、班ごとにプレゼンテーションを実施しました。

【焦点1】

井波にはどのような文化資源、観光資源が眠っているのか。

【焦点2】

町の資源は見の人によって印象が変わり、価値を見いだせる可能性がある。





☆3回目：2012年11月2日

テーマ：商店街の将来像と施策の検討

第1部：ディスカッション

前回のフィールドワークでは町歩きを行い、井波の隠れた観光資源や文化資源を再発見・再評価しました。同時に、井波の抱える課題が明らかになってきました。それらをどのように解決し、町を活性化するのか、また、将来、井波はどうなっていくべきなのか。グループごとにディスカッションを行いました。

第2部：プレゼンテーション

井波の将来像に向けた各班での結果を報告しました。中でも印象的であったのは、井波の持ち味は、「きちっと」した原風景が残り、仕事を「きちっと」こなしていく精神風土があること。その精神性を失わずに、今後もまちづくりを行っていくことが必要であるとみんなで合意しました。

【焦点1】

外部から見て、井波の課題とは？

【焦点2】

実際に住んでいる地域住民が井波の将来像をどう描くか。



☆4回目：2012年11月24日

テーマ：他地域の事例から学ぶ

第1部：彦根市「夢京橋キャスルロード商店街」、「花しょうぶ通り商店街」視察

今回のデザイン塾は、「コミュニケーションデザイン」がテーマです。商店街は、ただ単にモノを売る場ではありません。商店街の間は勿論、地域で共に暮らす消費者や外から訪れる観光客の方々と、豊かなコミュニケーションが繰り広げられる場であることが必要です。そこで、その参考事例として、滋賀県彦根市の「夢京橋キャスルロード商店街」と「花しょうぶ通り商店街」の取り組みを視察しました。前者は、かつての城下町の建築コードを、今の町並みに再現した商店街です。しかし、ただ単に過去の建築コードを今に移しただけでは、豊かなコミュニケーションの場にはなりません。そこで、町の歴史をテーマに、場を活かすソフトな取り組みを積極的に行っています。後者は、対照的に古くからある商いの場がそのままになっています。商店街に蓄積した日常レベルの「履歴」を、そのまま現代に繋いでいる地元の商店主の熱意ある活動が大変、参考となりました。





第2部：上丹生木彫の里（米原市）視察

上丹生（かみにゅう）は、霊仙山の麓、丹生川と宗谷川の谷筋にあります。木彫りの起源は200年ほど前であり、最盛期は、50名近い職人がいました。時代は、中々厳しいですが、同じく木彫の里として、共通の悩みもあり、また、相互に参考となる部分もある、大変有意義な視察、意見交換会でした。

【焦点1】

彦根城から商店街へ、人を呼び込むことができた理由とは？

【焦点2】

同じ木彫りの里である「上丹生」から何が学べるか、一緒に何ができるか。

☆5回目：2012年12月14日

テーマ：“きちっと井波”を語ろう

プレゼンテーション&ディスカッション（公開討論会）

最後となる5回目では、学生たちが「井波のこれから」についてプレゼンテーションをしました。1～3回目までのワークショップ&フィールドワークを通して見えてきた共通のコンセプトは“きちっと井波”です。井波彫刻、祭、暮らし方など、何ごともきちっとしている井波の土地柄は後世に受け継がれるべき精神性であり、その継承を目指して具体的な施策を発表しました。

【焦点1】

井波の“きちっと”“ちゃんと”する風土にはどのような魅力があるのか。

【焦点2】

実直で、何ごともきちっとこなす風土を誰がどのように受け継いでいくのか。

*文中の内容は、報告書「県デザイン経営塾7」を元に、再編集したものである。

